

# 日本史研究における

## 〈急進主義とその昇華〉論の射程 (一)

溝 部 英 章

### 目次

はじめに——問題は何か

第一章 〈急進主義とその昇華〉とは何か

(以上、本号)

第二章 急進主義問題のコンテキスト

(以下、次号)

第三章 急進主義問題の射程

おわりに——展望

### はじめに——問題は何か

日本史研究において、民衆的〈急進主義とその昇華〉という視角は、有意義で実り多いものだろうか。これが本稿の

問題関心である。

ここで急進主義とは、民衆が自分たちの集団的自力により政治的に共同自存しようとする運動（その志向や思想を含む）を指す。〈我々が〉共同主体となって正義ないし正しい秩序を実現しようとする。ただ被支配層である民衆が自らを主人＝主権者にする運動だから、高まっていけば、支配層と衝突せざるをえない。非日常的な次元へと至らしめ、変革の露払い役となる。しかし新体制を建設して、再び日常的次元に戻る役目は得意でない。そうすれば高まった民衆性が失われるからである。破壊に強く、建設に弱い。抑圧され、挫折する歴史が描かれるのが通例である。

しかし重視されるべきは、その「敗北」の歴史が哀惜されたことではない。民衆的急進運動を蹴散らして建設された新体制の下で、民衆が満足を見いだすかどうかの方が重要だと考えられてきたことである。むしろそうした民衆の是認に、新体制の存立と正当性がかかっているとさえ認識されてきたことである。民衆が否認したことにより、旧体制の命運が尽きたという歴史観さえ形成されてきた。

こうして急進運動で表明された民衆の意向を実質的には生かすことが、支配層が新体制を構築していく眼目になった。旧体制の否認と倒壊に役立った民衆の願望や正義感を、新体制に取り込んでこそ、盤石の体制を構築することができると考えられた。また直接的な感情に突き動かされた民衆に対し、感情をコントロールすることの重要性を教えることができれば、支配層の民衆に対する道徳的な優位を再建することができると考えられた。

このように民衆の素朴な願望が換骨奪胎されて、新体制の中で実質的に満たされていく過程を〈昇華〉と呼びたい。昇華は精神分析学の用語で、「本能的（性的・攻撃的）衝動を、社会的に是認される有益な活動にふり向けること」<sup>(1)</sup>を意味するが、若干拡大解釈して用いたい。旧体制を破壊した毒が、新体制を基礎づける薬へと変換されることである。民衆が大人しい被支配層というお仕着せの衣装を脱ぎ捨て、自らこそ主人だといきり立った、その気持ちだけは尊重さ

れつつ、実体としては再び被支配の地位に甘んじるよう、嚮導されることである。

日本史の特質は、アジアの一国でありながら、中世↓近世↓近代↓現代へと継起する歴史をもったことである。それは天下一統、明治維新、日中日米戦争という三大変革のおかげである。なぜ日本史は、段階をおってより高度な統一を次々と実現していく進歩の歴史をもつことができたのか。その理由を〈急進主義とその昇華〉という枠組みで説明できないだろうか。これが本稿の問題設定である。

註

(1) 『コンサイス20世紀思想事典』（三省堂、第二版、一九九七年）における岸田秀執筆の「昇華」より引用。

## 第一章 〈急進主義とその昇華〉とは何か

### 一 進歩の継起

さて、前稿「日本政治史における急進主義の問題」<sup>(2)</sup>において、〈民衆的急進運動の波状的興起その昇華による体制転換〉という日本史観を提示した。①天下一統、②明治維新、③日中日米戦争という、日本史の三大変革は、それぞれ①民衆の〈無縁・無主〉願望、②〈世直し〉願望、③〈社会の自己防衛〉願望が起点にある。それらが民衆を急進化させた。いづれにおいても民衆の共同体感情が高まり、願望の実現を急いだ結果、既存体制内に収まらなくなった。現存体制が否認された。

しかしこの破壊は、過去へと戻ることを帰結しなかった。むしろ進歩の方向に舵が切られ、民衆の願望を実質的には

生かす新しい体制が形成された。民衆の急進主義が旧支配層の自己革新を促し、結果的に急進主義の訴えを受けとめる新リーダーシップを形成せしめたからである。ここに急進主義は〈昇華〉されたといえる。反体制の思想と行動が、そのままの形で抑圧されながらも、新体制を正当化するイデオロギーに転化しているからである。

かくして、日本史においては民衆による①中世の否定が近世をもたらし、②近世の否定が近代をもたらし、③近代の否定が現代をもたらすことになった。この中世↓近世↓近代↓現代という進歩の継起を当然視してはならない。日本史に馴れ、自明視すると、その特質を見失うことになる。他の道もあり得た中で、この進歩の道が選択されていた。なぜだったのか。考える価値がある。

ちなみに古代↓中世は、昔から見解が分かれてきた。領主制の発達をどう見るかにより、弛緩（統一の喪失）だと否定的に捉えられるか、あるいは国家の実質的な担い手の増加による進歩だと積極的に捉えられるか。いずれにせよ、日本史が中世史を持つことができたことの意義は、繰り返し問われてきた。それに比べ、中世↓近世↓近代↓現代は、統一がその質を高めつつ進展する一直線の過程であるかのように捉えられてきた。近世的統一を持つことの意義、近代的統一とどう違うのか、近代と現代とはどう違うのか。こうした本源的な問いが、なかなか問われてこなかった。

日本史における進歩の継起を自明視してはならないのは、まず①中世的分散の否定が、たんに古代的統一の先祖帰りの復活でしかなかった国が多いからである。そうではなく、さらなる分散の急進的追求を、集権を前提とした分権の枠組みで懐深く受けとめつつ、地方的・身分的自治を生かす、緩やかな近世的統一を実現できた国は少ない。日本は幕藩制と士農工商の身分制により、分権と統一の精妙な配合を実現することができた。それにより近世を実現した数少ない国の一つとなった。

同様に②近世の否定が、近代的統一に向かうのではなく、実質的に中世的解体（表面的には対外寄生による統一維

持）への逆戻りでしかなかった国も多い。同治中興以降の清朝中国が典型である。欧米と応接する総理各国事務衙門を中枢機関として設置したり、洋務運動に乗り出したりしたもの、実態は帝国機構に巣くう軍閥の割拠のさらなる進行でしかなかった。

明治維新は近世的分権構造（幕藩制と身分制）の否定であり、中央集権の急進的実現であったが、他方で個人の自由も急進的に促進した。「一身独立して一国独立す」（福沢諭吉）がスローガンとなった。〈個人としての自立〉と〈国としての自立〉という相反するベクトルが同時に追求された。にもかかわらず矛盾だとは感じられなかった。自由と共同が期せずして実現するのが近代的統一であるが、明治日本はそれを達成した。日本は自由主義段階をたしかに経験した。日本史には近代段階が存在した。

さらに③近代の否定が、社会主義（市場経済や政治的自由の廃絶）という名の前近代回帰でしかなかった国々も多い。たしかに二〇世紀において、一九世紀的自由主義（市場経済＋バランス・オブ・パワー）は秩序をもたらさなくなっていた。市場経済は不景気や恐慌に陥らせて、成長をもたらさないことが多くなり、成長を実現した場合も格差や分断を伴った。バランス・オブ・パワーは戦争を常態化していた。かつ戦争は総力戦化して、余りにも多くの犠牲を伴うようになっていた。戦争は他の手段を以てする政治ではなくなっていた。一言でいえば、市場経済においても、国際政治においても、自由が弊害多いものになった。自由が秩序をもたらさなくなった。

だからといって日本は、自由を廃絶するという安易な道には走らなかつた。〈社会の自己防衛〉願望に突き動かされて、この社会主義の道に猪突していく国もあった。そうではなく自由を生かしつつも、共同秩序をも同時に実現できる高次な道がじつは求められていた。それが現代（自由と共同との意図的実現）への向上の道を切り開く。日本は戦時総動員体制の構築を通じて、たしかに現代へとステップ・アップした。〈個別が自由であればあるほど、事後的に全体秩

序が顕現してくる」といった程度だった近代的統一のレベルを超えた。へ自由に己れを生かしていこうとすれば、自ずから社会全体の組織化に貢献する」という現代的統一を実現していった。

## 二 急進主義とその昇華

なぜ日本史は、このように古代↓中世↓近世↓近代↓現代を段階的に経験することになったのか。これが問いとして成り立つことを確認しておこう。へ急進主義が次々と興起したが、そのたびに昇華されていった」という史観が、その一つの説明を提示するであろう。

①中世末における民衆の反領主制の動きが、中世を否定し、近世へと進歩していく歴史の起点にある。網野善彦はこれをへ無縁」志向と概括した。へ無主・無縁」という、著名だが問題的な概念は、へ古代国家を蝕んできた」荘園領主制や在地領主制を否定しようとする民衆の動きだと理解されるべきである。この動きを後押ししたのは、古代的なへ天下の百姓」観念であった。古代↓中世の歴史の成り行きを大逆転しようとする以上、急進主義である。それだけにこの急進主義がへ昇華」されなければ、たんに古代国家が復活しただけに終わったかもしれない。

ところが実際に帰結したのは、兵農分離による近世化であった。民衆的急進主義の一直線の発露による古代の復活でも、その抑圧による中世の継続・深化でもなかった。農民は農村から在地領主を追い出し、城下町に集住せしめた。年貢の村請けを引き受ける代わりに、農村の自治権を得た。商工民衆は、城下町に住まわされたが、商工領域においては自治権を得た。つまり民衆の急進化は、そのままの形では実現しなかったものの、領主支配層の自己革新を促し、民衆の願望をへ昇華」して生かす近世の新体制を建設せしめた。

農民は自らの農村ではへ主人」となった。武家支配層のへ統治」権を否定しないかぎり、農商工民衆はへ自治」権を

得た。このような〈昇華〉はなぜ起きたのか。中世末における領主層と民衆との対立は、なぜ、かつどのようなにして、このような双方が半ばの勝利を得る形の決着を見たのか。

②明治維新を遂行したイデオロギーは、尊王攘夷主義である。これに大方の異論はない。しかしなぜ尊王攘夷だったのか。また維新成功後、明治国家は尊攘主義の延長線上にたしかに〈一君万民・万国対峙〉の天皇制国家になりはしたものの、同時に文明開化国家にもなった。尊王攘夷の古き情熱は維持されながらも、むしろ開明的な文明開化＝西洋化を徹底的に遂行した。攘夷＝排外というよりも、国際社会の一員となり、そのなかで西洋先進国に認められようと、近代化を進めることが目指された。市場経済とバランス・オブ・パワーという、オーソドックスな自由主義路線が確立した。

逆説的な過程である。なぜ尊王攘夷主義による変革が、自由主義を確立することになったのか。自由主義を教義として信奉したわけではないのに、なぜ自由主義国家となったのか。この謎は、そもそもなぜ尊王攘夷主義が、近世支配層内の改革派によって体制変革イデオロギーとして信奉されるにいたったのかを説明して、初めて解けるだろう。

近世幕藩体制は盤石であった。幕府・諸藩および士農工商の皆が、基本的にはこの体制に満足していた。反体制勢力は存在しなかった。この体制がなぜあつてなく倒れるに至ったのか。通常、それは外圧によって説明される。しかしそれは答えにならない。清朝中国が実際そうなったように、対外寄生による旧体制延命が、一九世紀における非西欧世界の一大勢だったからである。むしろ説明されるべきは、欧米の現地エージェントとして生き延びる道に誘い込もうとする誘惑を振り払う動機が、どのようにして日本の武家支配層内に生じたのかである。

それは民衆の急進化であった。しかもそれが反武家の民衆的急進主義であったのなら、支配層の反動化を招き、体制変革には至らなかつたらう。ところが近世後半、民衆は自治を完全なものにすべく、徐々に急進化していったが、そ

これはあくまで武家支配層が創設してくれた近世支配体制をより良く改善するためのものだと思っていた。武家が与えてくれた民衆の共同体自治の仕組みが出发点であり、その枠組み内での改善でしかないと思っていた。民衆は武家支配層に挑戦する理由も必要もなかった。むしろだからこそ安んじて急進化した。

近世後半、農村共同体は富農（発展する農家）と貧農（落伍する農家）との乖離により、危機に陥っていた。しかし富農は貧農を見捨てなかった。さらに共同性を強化することにより、貧農も抱え込んでいこうとした。それは現実には無理があった。近世の支配イデオロギーは、第一に農村共同体を拡充する（農村が自律する小世界となる）ことと、第二にその共同性が過熱しないよう、農村を構成する各農家が発展することの両方であった。農村が〈大躍進〉風な、地に足が着かない発展を目指すことのないように、〈個別農家の発展が農村全体を進展させる〉という具合に、現実的な道に導いた。それだけに、一部の農家の発展が農村の共同性を傷つけてしまう事態の到来は想定外だった。

しかし逆に言えば、貧富の格差問題をもし自主的に解決できたならば、そのとき真に体制的な危機をもたらしてしまわう。これまでは富農が発展してきて、共同体性を傷つけるようになると、武家支配層が村役人に選任し、その地位を認めしつづ、しかしあくまでムラの一員であり続けるよう釘を刺すのが常であった。その意味で権力が農村秩序の最終保証者だった。あくまで武家支配層が統治者で、農民は被支配民衆だった。

しかし近世後半、富農が貧農に対し慈悲的に手を差し延べるだけでは済まないほど、経済発展から帰結する対立が深刻化した。貧農が自己の農家経営を進展させる展望を失い、それだけいっそう農村の共同性を観念的に担うようになった。富農は、〈勤勉に働きさえすれば、どの家も発展への道を歩むことができる〉という伝統的イデオロギーが色褪せていくことに気づいた。貧農は脱落者ではなく、むしろムラの主役である。こう開き直った。祝祭的なハレを担っているからである。富農がいくら勤勉であるよう論しても、それはケにおける索漠とした現実でしかないと思つて見下さ



れた。ハレにケを機械的に対置しても、魅力を持たない。富農は手詰まりに陥った。貧農によるハレの急進的追求の鼓吹を上回る説得力をもつことが必要とされた。

そのため、富農は経済発展に「個々の農家の発展を可能にするもの」以上のハレ的意義を持たせようとした。豊かさは個々の農家の富の集積ではなく、全員で力を合わせて初めて獲得可能な公共財産だと説得していこうとした。しかしそのためにはムラの共同体的踴躍を打破する必要がある。下からの民衆的経済発展といえるような共同事業を成し遂げようとすれば、地域共同体を隔てる障壁が邪魔になった。しかしこの分け隔ての構造が幕藩体制の基礎的安全装置であり、それを突破しようとするのは、体制変換を意味した。

こうしてまず農村で危機が高まった。「世直し」が語られるようになった。農村だけでは解決不能だったが、唯一、外国貿易が体制変換なしの解決の道を提供するかもしれない。しかしそうなれば幕藩権力はもう実質的には不要になるかもしれない。外庄問題が重なったとき、農村の危機が体制危機だと支配層に映じ始めた。

このとき支配層内に改革派が登場する。農村の危機を解決すれば、また再び支配層による権力運営を全員にとって必要不可欠とすることができると可能性があった。中世末には、民衆に自治権を与えることにより、統治権を確保した。兵農分離して、農民を直接支配することはできなくなったものの、農民を大多数の成員とする「国」を統治する権限を確保した。この近世末の農村共同体の貧富の格差拡大に起因する危機においては、貧富を問わず全員が発展に向けて邁進することができるナショナル規模での舞台を提供しようとした。その発展に公共的「ハレ」的意義があることを示すために、国際社会の競争場裏に国として打って出ることにした。尊王攘夷主義が支配層内改革派のイデオロギーとして形成され信奉されていった。

尊王は、幕藩制・身分制・地域共同体制（ムラ・マチ制）といった分け隔て構造を破壊しても、それによってアナ

キーな急進主義に点火しないための仕組みだった。いわば毒を以て毒を制した。攘夷は、果てしのない国際競争が不可避になることの覚悟を決めさせた。日本人は特別な存在であると信じ込ませることができて、初めて国際競争に不転の決意で臨ませることができた。ただ尊王攘夷ナショナリズムは過熱する危険があった。とりわけ分け隔ての構造が廃されてからは、ある意味では全員が民衆化する危険があったので、とりわけ共同性を冷ましつつ、しかし競争に打ち込ませるイデオロギーが必要となった。それによって全員をミドルクラスに上昇させる、少なくともチャンスを与えようとした。その役割を果たしたのが自由主義であった。

### 三 近代現代移行論

③ 明治国家Ⅱ 一九世紀段階の国民国家は、自由と共同性が自然に両立すると想定した。近世末、農村で自由（農家の発展）と共同性（農村の発展）が矛盾するようになってしまった。富農は各農家が自由を実践することによる、農村共同体全体としての向上を目指した。貧農の方は自由なき共同性の、全員による実践を目指した。富農は自由による共同性を目指したものの、貧農は自由なき共同性の方が真の神聖な共同性だと反発した。

農村両派の対立に直面して、支配層内に改革派が形成される。改革派支配層は、村落の共同性も尊重しつつも、国全体という規模のナショナルな共同性こそ真の共同体だと新生面を切り開いた。この飛躍こそ、民衆にはできないことだからである。

しかもこの段階では、民衆が村落規模を超えて〈国全体〉の規模で「想像の共同体」を実感していくことができれば、それだけで急進主義の〈昇華〉であった。直接の共同性をこえて、「同じ日本人だ」というだけの見ず知らずの人々と〈生死をともしする〉共同体を築こうとしているからである。そのための仕組みが〈国民皆兵〉であった。自由

が共同体を攪乱しないための嚮導の仕組みは、学校体系の整備によって与えられた。立身出世の道が万人に開かれた。

だが国民共同体の形成による村落共同体問題の解決が、本当の問題解決であったかどうかの試金石としては、じつは市場経済のコントロール問題が最重要であった。というのは、国民皆兵が大きな意味を持つには、一九世紀段階では戦争はまだまれで例外的事態であった。学校体系がハイカルチュアを全員に共有せしめることの国民統合効果の方も、高等教育が大衆化する以前の段階では、即効性のあるものではなかった。民衆が新たに〈国民になった〉ことの意義を日々実感できるのは、やはり経済領域であった。

富農は全村人を勤勉により経済発展させることを通じて、ムラを完全自治体にし、それによって武家支配層の存在を無用化できるのではないかという、途方もない大望をいだいた。貧農もまたアンビシャスにも、観念的祝祭的共同性の次元こそ、人を甦らせる真の共同性ではないかとし、その使徒たらんとした。この対立は、天皇を戴く自由主義国民共同体への飛躍により、双方を少しづつ満たす形で仲裁された。これが近世末の民衆的急進主義の、近代への〈昇華〉であった。

かくして明治国家は、ヤヌスのように相反する二つの顔をもつことになった。一方では国体論、他方では自由な市場経済が根幹としてすえられた。肝心なことは、両者の統一が、国民一人一人の心に委ねられたことである。個人単位の激しい競争を余儀なくされていることと、天皇の下での日本人共同体を形成していることとの相互関係について、突き詰めて問われたり、吟味されることはなかった。一九世紀段階ではこれで良かった。

近世農村では解決不能だった自由と共同性との対立が、国民国家への飛躍によって解決されたという体制イデオロギーに説得力を与えてきたのは、じつは「在来的経済発展」(中村隆英<sup>3</sup>)であった。皆が同じ〈国民〉であることの、誰もが実感できる根拠は、日本の〈国民経済〉の発展に誰もが参与しているという点にあった。国際競争に参加するこ

とを通じて明確な輪郭を持つことになった〈国民経済〉の、誰もが不可欠の主体だという感覚であった。

国際経済の冷厳な現実上、明治以降の経済発展は、国際競争場裡で伍していくために、いわゆる「上からの経済発展」の道を進むことが必然化した。輸入された最新技術を駆使する大資本経営が発展の中心をなした。しかし明治日本の場合、それが孤立しなかった。根無し草のように、特区でのみ花咲く徒花に終わらなかつた。それは中小経営を中心とした在来産業が精一杯、勤勉さと在来技術の活用により、〈下からの発展〉を遂げて、国際的大企業を補完したからであった。

市場経済のコントロールが最も困難である。市場経済の優勝劣敗の現実に曝すことが、急進的の一体化志向を醒ますには最も役立つ。しかし醒ますだけでは、競争からの落伍者がかえって観念的の一体性を呼び込み、権力を握って市場経済を廃絶してしまうかもしれない。明治日本が急進主義の〈昇華〉に成功したのは、貧農Ⅱ一般民衆が求める観念的の一体性を、国際競争場裡における強国化（〈上からの経済発展〉の成功が可能にした）により満たす一方、富農Ⅱミドルクラスが求める市場経済に裏打ちされた現実的の一体性の方も、〈下からの経済発展〉の実効性により満たされたからである。近世末の農村における富農たちの〈皆で発展する〉ための涙ぐましい努力は、舞台をナショナルなレベルに移し、国際的な連関も持つことにより、確かに実った。あくまでムラを捨てなかつたことがようやく報われたのである。

ところが二〇世紀の戦間期の危機は、この〈上からの発展〉と〈下からの発展〉との総合が崩れたことに淵源する。〈上からの発展〉が〈下からの発展〉を可能にし、〈下からの発展〉が〈上からの発展〉の基盤となるという、一九世紀には可能だった相互促進状況がなくなった。〈上からの発展〉が厳しい国際競争場裡で生き抜いていくためには、〈下からの発展〉を切り捨てなければならず、逆に〈下からの発展〉の維持にこだわっていると、両方ともが共倒れになる客観情勢が現れた。体制的困難が深刻化するなか、新たな民衆的急進主義が登場すべき客観的必然性が現れた。

自由と共同性が自然にはかみ合わなくなれば、意図的・人為的にかみ合わせる以外ない。戦間期危機のこの時代、どの国においても〈社会の自己防衛〉の役割が民衆の双肩にかかった。民衆が市場経済に最も傷ついていたからである。市場経済を社会に〈埋め込む〉ことにより、一九世紀的な自由放任の自由主義を克服しようと、大別してファシズム、ニューディール、社会主義が進路として取られた。これがカール・ポランニー『大転換』の命題<sup>(4)</sup>であった。

市場経済による社会の分断を修復するのは、どこにおいても民衆であった。民衆の急進主義を抑えるためにこそ、市場経済が導入された過去があるからである。急進主義が救国のための出番を迎えた。ただ市場経済や自由主義政治で、どれほど社会が分断されているかに応じて、民衆の一体性の発露の仕方が違った。

政治・経済両面で自由主義による社会統合（ミドルクラス中心主義）が基本骨格上は保たれていたアメリカは、修正で済んだ。自由主義政治に民主主義による補完を加え、そのようにして補強された政府によって市場経済が修正されるまでが、民衆的急進主義の出番だった。黒人や都市新移民が政治的権利を勝ち得る一方、資本主義への政府介入が常態化するに至る。しかしどれほど民主化されても、自由主義は自由主義、どれほど修正されても、資本主義は資本主義であり続けるのが、アメリカだった。それがニューディールであった。

分断の程度が最も重いソ連・ロシアでは、民衆の統一修復力も観念上のものにとどまる。しかしそれだけに期待は高い。そこを利用するのが前衛党である。革命的共産党が民衆の主権的機能を代行すると称する。市場経済の廃絶と自由主義政治の根絶、つまりは前衛党による一党独裁によって、初めて全能の民衆の一体性を顕現させることができる信じさせた。

米ソの中間にるのが日独である。両国とも、すでに個別主体の自由に媒介されてこそ、ほんものの共同性に到達できるとする段階に達していた。ミドルクラスが担う自由主義段階を経ていた。しかし今や自由であれば、一体性が損な

われる危機に逢着した。とりわけ日本は、近世末に自由が共同性を生まないことに苦しみ、そのためにこそ維新を遂行して国民国家を形成したという経緯があつた。今や経済的利害は人々を一体化するよりも、鋭く分断するようになっていた。

観念的の一体性が必要とされた。しかし日本でいえば明治期におけるような天皇制の観念的共同性に浸るだけでは済まなかつた。それは何より自由を統御していなかつた。自己の想念上の満足にすぎなかつた。市場経済や国際政治のコントロールに実際問題としては取り組んでいなかつた。自由が自ずから秩序を生むような仕組みの形成に取り組んでいなかつた。せいぜい「上からの発展」に「下からの発展」を組み合わせて、自由な発展に共同事業的色彩を与えていただけであつた。

自由であればあるほど、競争ではなく、共同性を生みだすような仕組みとは何か。それが自らを一つの「世界」を建設するための戦士とするという方式である。一九世紀段階では、観念的共同性を先天的に確保していたので、それとは別次元で個別自由から帰結する競争に従事していればよかつた。自由と秩序、競争と共同性が長い眼で見て調和すると信じてることができた。これに対し、二〇世紀段階になると、自由であることを通じて、共同性を實現していくことが求められた。

今や自由には目的がなければならぬ。自由であるための共同世界を建設することを目的とするよう、全員に求められた。英米協調という明治以来の基本枠組みを離れ、満州事変以降の道を歩むことがなければ、日本において自由と共同性の相互関係がこのように真剣に問い直されることはなかつただろう。

民衆はそれまで、たんに自由がもたらす共同性の質の批評者であればよかつた。せいぜい観念的な一体性の担保者であればよかつた。それが民衆内で自由をめぐる葛藤を引き起こし、民衆上層のミドルクラス（自由の実践）への上昇を

促し、支配層内に改革派（自由でありうる新秩序建設）を生みだす基盤であった。

だが二〇世紀になると、自由が社会分断の刃となった。このとき民衆自身が自由のための戦いに乗り出すときが来た。満州事変に始まる一九三〇年代の歴史が、〈戦争への道〉となり、日中米戦争へと至らざるを得ず、世界大戦を戦うことになったのは、やはり一つの〈世界〉を創造しようとする総力戦になったからである。アジア地域で国際・国内秩序の最終責任者となり、その責任を果たせるよう、国内経済を国家総動員システムに組織化した。競争の副産物としての発展ではなく、発展が第一目的となり、そのために全員が配置に就くという形になった。

自由を可能にする世界を創造するという活動に従事することを通じて、「自由とは必然性の認識である」というレベルに達した。しかも民衆自身がここまでのレベルに達した。自由でありうる空間を創設するためには、大東亜共栄圏建設が必要であり、かつその遂行のために戦時国家総動員体制が必要だと民衆までが理解した。従来のように、自由を具体的に担うのはミドルクラス、民衆は共同性の最終担保者という分担ではなくなった。自由が問題的事であることを最も切実に感じた民衆が、自ら自由のために隊列を組むに至った。ただ自由と共同性をめぐる問題性を自ら解決に乗り出すことになった以上、日本の民衆は民衆性をストレートに保ち続けることはできなくなった。

アメリカはミドルクラス中心主義を貫くため、ニューディールによりミドルクラス（自由でありうる個人）たりえない民衆を政治的・経済的に補強した。ソ連・ロシア（及び中国以下の一党独裁共産主義国家）は、党が民衆と向き合っている、その急進性をコントロールする。急進性を統御する効果的な方法は自由を与えることだが、そうすれば前衛党の存在意義がなくなってしまう。このディレンマのなかで行きつ戻りつを繰り返した。いまだに民衆的急進主義の〈昇華〉には成功していない。中国は「改革開放」により、経済面に限って自由を与えて巨大なエネルギーを解放した。しかし政治責任を負わせないことにより、民衆から民衆性を払拭させるに至っていない。

日本は、民衆に自由空間創設の共同事業に乗り出させることを通じて、期せずして民衆性を払拭させていくことになった。他方で、ミドルクラスの方も総動員体制による発展を選択した以上、もはや市場経済の担い手であることを第一目的とはしなくなった。自由を通じて秩序を形成することが取り柄だったが、その特質を失った。発展という目標の方を優先した。そのためには個別主体として自由な選択を行うよりも、むしろ総動員に応じて喜んで配置に就くことを厭わなかった。すべての生産要素が無駄なく使われて、発展が可能になることを喜んだ。それが自由な空間を創設維持することに貢献することになるという連関にコミットした。

自由とは役割遂行だと覚悟ができたとき、日本のミドルクラスは下級ミドルクラスに地位低下した。そのようにして生き延びた。戦間期危機を解決する主導勢力たりえなかった以上、致し方のない帰結であった。

逆に、民衆はその功績により地位を向上させた。民衆性を最終的に払拭することに成功した。しかしそれが落とし穴だった。日本人の一億総〈新中間大衆〉化（村上泰亮）は、戦後高度成長を通じて実現したといわれる。しかしそのレールは、「日本帝国主義」の尖兵が現場の巡査と教師であったといわれる歴史から敷かれたのではないか。一般庶民に至るまで「一億火の玉」となり、自由でありうる世界を建設する戦士になったという過去が日本を〈新中間大衆〉社会にしたのではないか。（未完）<sup>5)</sup>

#### 註

- (2) 拙稿「日本政治史における急進主義の問題」(一)(二完)、『産大法学』第四四卷第二号、第三号、二〇一〇年。
- (3) 中村隆英『明治大正期の経済』（東大出版会、一九八五年）の「Ⅱ 在来産業論」に所収された「在来産業論の発想」以下の諸論文。
- (4) 拙稿「日本史における〈大転換〉問題―研究序説」(一)、『産大法学』第四三卷第三・四号、二〇一〇年）を参照されたい。



(5) 本章では、民衆的〈急進主義とその昇華〉史観をとりあえず一通り提示することを急いだ。依拠した諸文献については、とりあえず前稿を参照されたい。

また、この史観がおかれる理論的コンテキストや歴史学的コンテキストについては、第二章で述べる。理論的にはマルクス、トクヴィル、デュルケーム、山之内靖らにおける急進主義問題が検討される。歴史学では、前稿から依拠している網野善彦、安丸良夫、昭和革新主義（伊藤隆ら）が再検討されるとともに、和辻哲郎や小西甚一の日本史像が照らし合わされる。

その上で第三章において、これまでの天下一統論（中近世移行論）や、明治維新論（近世↓近代移行論）、一九三〇年代論（近代↓現代移行論）が、この史観からどのように再照射できるかを検討する。

中近世移行論では、移行の基軸が領主制の統合（↓国家を担う）にあったのか、それとも惣村の充実や民衆的商業ネットワークの充実（↓民衆世界の形成）にあったのか、民衆⇨急進主義、支配層⇨〈昇華〉という役割分担を視点として再検討される。

近世近代移行論では、在来産業論が再照射される。自由⇨市場経済が大々的に推進されたのも、それが受忍されたのも、下からの経済発展が強靱な生命力を持っていたからである。中近世移行論において「地侍」層（領主であるが農民共同体の一員でもある）の動向がカギを握ったように、近世近代移行論でも、富農層が下からの経済発展を担えるかどうかのカギを握る。

近代現代移行論でも、下からの経済発展が展望を失ったときに移行が開始されたことを改めて重視したい。そこで民衆が急進化し、下からの経済発展も上からの経済発展もともに可能にする地域世界の建設を目指した。民衆的経済発展は、日本人のそればかりでなく、帝国圏、共栄圏のそれも含まれる。まさにここで「東アジア資本主義」（堀和生）が形成された。敗戦が戦時期急進主義を〈昇華〉するきっかけとなったが、それがもともと自由世界建設を目的としていたという目的意識の喪失がその帰結であると述べられる。目的を失った自由は、戦後日本を自動発展マシンと化した。